

# 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（小学校国語）

沼間小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

<p>結果の概要</p>	<p>全科目を通して、平均点は全国平均を若干ではあるが下回る形となった。どの教科でも共通して、標準偏差が全国平均を上回っており、各データの結果を見ると、高得点を取っている児童とそうでない児童との差が大きいに感じる。また、点数が取れていない児童は無回答が多いという結果になっている。</p>
<p>言葉の特徴や使い方に関する事項</p>	<p>○漢字以外の設問は無回答が少なかった。                  ●全国平均と比較すると最も苦手とする領域であることが分かる。特に漢字の問題については、無回答の割合が他の問題と比較しても高い。担任した教員によると、本校の児童は漢字に対して苦手意識が高いことがわかっている。そのため、考えることをせずに無回答で提出した児童も一定数いることが想定される。漢字に親しみを覚える授業づくりを検討していきたい。</p>
<p>話すこと・聞くこと</p>	<p>○どのように話すかを書く設問では、全国平均よりも無回答率が下回っている。                  ●誤答の多くは、具体的な解決方法が示されていないことが原因であった。誰かの考えに対して自分の考えを示すことは多くの児童ができていたが、そこから解決方法に至るまでの思考ができていない。自分の考えをもってから、どのように解決するかに発展させることを授業でも取り入れていきたい。</p>
<p>書くこと</p>	<p>○記述問題の正解者の多くは、示された条件の全てを達していた。                  ●話すことの記述問題と比較すると無回答率が非常に多くなっていた。児童の多くは、このような長文の問題に慣れておらず、回答するまでに至らなかったことが考えられる。正答の内容に注目すると、比較的とりくみやすい「聞いたことをもとにしている」ことを書いた児童が多く、自分でよいところを考えた児童は少なかった。</p>
<p>読むこと</p>	<p>○2-1の問題は、全国と比較して7.5ポイント上回っている。登場人物の心情理解については授業で系統立てて指導している成果がでたと考えられる。                  ●選択問題にも関わらず無回答が5ポイントを超える問題が複数あることは、課題として考えられる。また、今回の記述問題は、文字数不足で誤答となっている児童が多かった。文字数が多くないにも関わらず達していないことは、問題をよく理解できていないことが考えられる。</p>
<p>児童質問紙 国語に関連する質問 問 49～52</p>	<p>国語の内容がよくわかると答えている児童が多いことはよいことだと言える一方で、「国語の勉強が大切だと思う。」「国語で学習した内容が将来役に立つと思う」と答えている児童は、低くなっている。算数や理科には見られない差であることから、国語の授業を見直す必要がある。日常生活で生かすことを意識した授業計画をしていきたい。このことは、教科の目標でも示されている。次年度校内研究として国語を全職員で学んでいきたい。</p>

# 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（算数）

沼間小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

<p>結果の概要</p>	<p>全科目を通して、平均点は全国平均を若干ではあるが下回る形となった。どの教科でも共通して、標準偏差が全国平均を上回っており、各データの結果を見ると、高得点を取っている児童とそうでない児童との差が大きいように感じる。また、点数が取れていない児童は無回答が多いという結果になっている。</p>
<p>(算数) 数と計算</p>	<p>○1- (1) の正答率が全国平均と同等で、無回答率も0であった。 ●1- (3) については無回答が10.1と多い結果となった。また1- (4) については正答率が全国平均を若干ではあるが下回る形となった。計算問題では、分からないと思うと解こうとしない傾向があるのではないかと感じる。</p>
<p>(算数) 図形</p>	<p>○図形の問題への無回答率は他の領域と比べて低かった。計算よりも苦手意識がなく、考え解こうという傾向がみられた。 ●4- (1) の問題については全国平均を9ポイントほど下回っている。正三角形の作図など頭の中でイメージして正しく作図する順序や方法の理解がいまひとつに感じる。</p>
<p>(算数) 変化と関係</p>	<p>○2- (1)、2- (2) の2問については正答率が全国平均を上回っている。無回答率も低かった。 ●2- (3) の正答率は全国平均より低いものの、無回答率は0であった。基本的な割合を求めることができるが、果汁が含まれている飲み物の量が増えると求めることに難しさを感じる傾向がある。</p>
<p>(算数) データの活用</p>	<p>○データの活用の問題は無回答率0が多かった。また、正答率も全国平均を上回っていた。 ●無回答率が0の問題は正答率もよいが、無回答率が高くなると正答率が下がってしまいます。正答は出せても、立式をするのに難しさを感じている。</p>
<p>児童質問紙 算数に関する質問 問53～60</p>	<p>算数は、国語とは異なり、「内容がわかる」だけでなく、あきらめずに色々な方法を考えることや、日常生活に生かせないか考えることができている。本校では、少人数指導を実践しており、より、児童ひとりひとりにあった指導を心掛けていることが今回の結果につながったと考える。しかし、正答率については、全国平均を上回ることができていないため、特に記述式の問題等を日頃の学習から取り入れていきたい。</p>

# 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果の分析（小学校理科）

沼間小学校

調査結果の概要及び教科の課題等（○良かった点や特徴ある点等 ●課題や改善点等）

<p>結果の概要</p>	<p>全科目を通して、平均点は全国平均を若干ではあるが下回る形となった。どの教科でも共通して、標準偏差が全国平均を上回っており、各データの結果を見ると、高得点を取っている児童とそうでない児童との差が大きいように感じる。また、点数が取れていない児童は無回答が多いという結果になっている。</p>
<p>「エネルギー」を柱とする領域</p>	<p>○正答には至らないまでも、与えられた条件をもとに、解答を導こうと努力していることがわかる。</p> <p>●標準偏差が高いことからわかるように、全ての条件を達成して正答になっている児童が多い反面、一つの条件も達成できなかつたり、無回答となつたりしている児童が多い。日頃の実験から、個人でも考える時間をつくっていききたい。</p>
<p>「粒子」を柱とする領域</p>	<p>○「粒子」を柱とする領域は、大幅に全国平均を下回っていた。この領域は、児童にとって親しみにくい傾向がわかった。</p> <p>●器具の名称を回答する問題でも、正答率が半分を越えなかった。毎回用いるわけではない器具でも名称を大切に、指導していききたい。粒子の学習は、全国平均よりも9ポイントも下回ってしまった。今年度の授業を見直し、次年度以降の指導に役立てていききたい。</p>
<p>「生命」を柱とする領域</p>	<p>○最初の問題ということもあるが、無回答率が0ということは喜ばしい。また、昆虫の定義について理解している児童が多いことがわかった。</p> <p>●問題1－(2)の問題の正答率が低かった。この問題は、自分の観察記録と他者の観察記録をもとにまとめる問題であった。国語の内容でも似たような傾向があったが、自分の考え・一つの考えを出すことに児童は慣れており、他者の考え・複数の考えを比較・検討する力が身につけていないと感じた。</p>
<p>「地球」を柱とする領域</p>	<p>○地球を柱とする領域の問題は、他の領域と比較して、無回答率が低く、児童にとって取り組みやすい問題であることが分かった。</p> <p>●無回答率が低いものの、他の問題と同様に正答率は高くなかった。とくに、鉄棒についての水滴の正体を答える問題では、「水蒸気」というキーワードを回答することができていない児童が多かった。</p>
<p>児童質問紙 理科に関連する質問 問 61～69</p>	<p>理科の勉強を好きと答える児童が全国平均よりも多い一方で、嫌いと回答する児童も多いという結果になっている。正答率だけでなく、意識の面からも二極化が進んでしまっている。問 67 に注目すると予想をもとに、実験や観察を行うことは多くの児童ができていることが分かる。他の設問からも実験や観察にも前向きに取り組んでいることが分かるため、そこから理科の学習の楽しさや面白さを伝えられるように授業を計画していききたい。</p>

# 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果分析（児童質問紙）

沼間小学校

## 特徴的なことや課題と考えられること等

全教科を通して、学力の差ができていたことが分かった。どの教科でも共通して高得点をとっている児童がいれば、どの教科でも苦戦している児童がいた。全国平均と比較することで、本校はその差が極めて大きいことが分かった。その後の質問紙調査からわかったことは、正答率が低かった児童は、各教科の質問に否定的な回答をしていることだった。コロナ禍での授業を模索した結果、他者との密なかかわりというのは少なくなってしまった。インターネットで調べたり、動画を見たりする学習も時には必要であるが、同じ教室にいる児童同士、関わりともに学び合うことの重要性は忘れてはいけない。

また、無回答率が全国平均を上回っていたことも見逃せない事実としてある。今年度だけでなく、昨年度も高い傾向であった。こういった問題量の多い試験に児童が慣れていないことが原因の一つと考えられるが、全ての問題を見通して、できる問題から解くことなど、回答の仕方についても指導する必要がある。

## 令和4年度全国学力・学習状況調査の結果を受けての学校としての取組

沼間小学校

### 調査の結果を受けて、今後の指導改善に向けて学校として取り組むこと

全教科、特に理科の学習において、正答率が高い児童と低い児童が二極化していることがわかった。正答率の低い問題の傾向として、複数の情報をもとに解答を導き出す問題や、複数の条件を与えられて、それに対して解答するといったものがある。児童は、コロナウィルスを契機に、他者と交流する機会が減ってしまった。その中でも、ICT機器の活用や、密を避けた上での交流を取り組んできたが、直接話し合うことはできていなかった。今年度からは、感染症対策を適切に行いつつも、顔を向かい合わせての話し合いや討論など、多くの考えが行き交う授業づくりに努めていきたい。また、日頃の授業以外でも、豊かな人間性の育成に向けて、思いやる心を大切にしたり、進んで学ぶことの大切さを考えたりする環境づくりに学校全体で取り組んでいきたい。